

詩編 第31編 15節

「私の時は、御手の中にあります。私を敵の手から、また追い迫る者の手から、救い出してください。」

夜が明けて朝がくる。町は車の往来や人々の急ぐ足音で動き始める。中には夜通し働き、朝になり帰宅する人々もいる。やがて夕闇が迫るころ、親子は慌ただしく家路につき、これから賑わいが始まる通りの灯りがひかりを増してくる。時計を見る者はあまりいない。流れに乗った生活、身についた歩みをしているようだ。

この歌い手は、時をどこかに見ることはない。また、時の流れに沿っているわけでもない。自分の時がどこにあるのかを歌う。どなたの時に自分のライフがあるのか自覚する。どなたの支配のもとにある自分であるのか歌う。

そのとき、置かれた状況、苦難からの救いを願う歌となる。幾度も救われた経験がある。だから「私を敵の手から、また追い迫る者の手から、救い出してください。」敵の手、迫る者の手から御手へと導かれることを歌う。

かつては、私の時は、私のものとしていた。しかし、様々な時を体験して知った真実は、私の時が御手の中にあるという事実であった。だから、これからも願い歌える。